

CLOSE-UP  
INTERVIEW

手妻師

藤山

大樹

さんに聞く

「聞き手」川島 葵さん フリーアナウンサー

日本の古典奇術を  
世界と未来へ伝える  
気鋭の手妻師

ふじやま・たいじゅ

1987年生まれ、東京都出身。法政大学工学部経営工学科(現・理工学部経営システム工学科)卒業後、2010年から藤山新太郎に師事。2019年、文化庁芸術祭にて日本マジック界歴代最年少で「芸術祭賞」を受賞。その功績と海外活動での実績が認められ、2021年には公益社団法人日本奇術協会より日本奇術界で最高位である「松旭齋天洋賞」を受賞。

## 不思議な現象の中に

## 日本文化の要素を盛り込む

**川島** 今回のクローズアップ・インタビューには、手妻師として活躍されている藤山大樹さんをお招きしました。手妻とは、日本に古くから伝わる伝統的なマジックだと伺っていますが、具体的にどのようなものなのか、また、なぜ手妻師への道を志されたのか、詳しくお話を伺いたいと思います。まずはあらためて、手妻とは何かを教えてくださいいただけますでしょうか。

**藤山** 文献をさかのぼると、日本の古典奇術の歴史は約300年といわれています。手妻の名称の由来には諸説ありますが、舞台では分かりやすく、「手を稲妻のごとく素早く動かす」ことから手妻と呼ばれるのだと説明しています。西洋からマジックが伝わってきた時に、日本古来のものが和妻、西洋のものが洋妻と呼ばれるようになったのですが、現在では、和妻の名前で国の無形文化財に登録されています。

**川島** 昔の人たちは、手妻をどのように楽しんでいたのでしょうか。

**藤山** 西洋のマジックには、魔法という意味合いがあるように少し魔術的な怪しいものという印象があります。が、日本人は手妻という名前のおり、不思議な芸を目に見えないほどの早業でやっているんだろうと理解していたようです。怪しいものではなく、あくまでエンターテインメントとして楽しんでいたんです。日本人のすごく粋なところだと感じますね。

**川島** 手妻は伝統芸能だけに、何かしきたりのようなものがあつたりするのでしょうか。

**藤山** しきたりというほどのものではありませんが、芸の中に日本の文化を取り入れているのが西洋のマジックとの大きな違いです。例えば、代表的な芸として、「蝶のたはむれ」があります。これは紙でできた蝶を扇子であおいで飛び回らせる芸なのですが、ただ飛ばすだけでなく、見立てを入れるのです。1匹の蝶がつがいになり、やがてたくさんの子どもを産む、そうした蝶の一生を一つの演目で表現するのです。そうすることで、ただ不思議なだけでなく、日本らしい奥ゆかしさを醸し出す。それが、手妻とマジックの大きな違いだと思います。



## 社会人サークルでの師匠との出会い

**川島** 「蝶のたはむれ」は私も映像で見させていただきましたが、本当に生きているかのように舞う蝶の動きの美しさに驚きました。こうした芸を習得するまでに、さまざまな努力をされてきたかと思いますが、そもそも、藤山さんが手妻の世界に興味を持たれたのはどのようなきっかけがあったのでしょうか。

**藤山** 私が最初にマジックに触れたのは中学生の終わりごろでした。Mr.マリックさんのテレビ番組を見て、自分でもやってみたいと思ったんです。今のように情報を簡単に得られないので、本で調べてやり方を覚えて練習しました。それを人に披露してみるわけですが、難しいことはしていないのにみんなが驚いてくれる。それがとても楽しくて、どんどんのめり込み、高校生の時にマジックの社会人サークルに入りました。そこに、師匠の藤山新太郎が訪ねて来る機会があったのです。

**川島** 高校生の頃にすでに師匠に出会われていたんですね。

**藤山** 社会人サークルの活動場所と師匠の事務所がたまたま近かったので、師匠がいらしたその日、メンバー数

人で事務所を訪問させてもらいました。そこでお話していたところ、公演を手伝って見ないかということになり、道具を出したりしまったりするような仕事をお手伝いしたのが最初のご縁です。

**川島** その時点で、将来、手妻をやってみたいというお気持ちはあったのでしょうか。

**藤山** 当時は手妻の道に進みたいという気持ちは全くありませんでした。確かにプロの舞台を手伝える機会はないので刺激的で楽しかったのですが、こんな伝統芸能もあるんだなというくらいの感覚でしたね。

**川島** 師匠の方には、藤山さんを弟子にとりたいたいという気持ちはあったのではないですか。

**藤山** まだ高校生でしたから、それは考えていなかったと思います。私たちの仕事はただ芸を覚えればいいわけではなく、事務作業も結構あるんです。舞台の進行リストを作るのももちろん、クライアントとの打ち合わせやお金の管理など、さまざまな人たちとコミュニケーションを取り



藤山 大樹さん

ながら、難しいことを自分でやらなければなりません。大学で学んで少し人生経験を積んだくらいの方がいいんじゃないかと思えます。

## 大学でマジックに情熱を注ぐ

**川島** 高校卒業後は、法政大学の工学部経営工学科（現在の理工学部経営システム工学科）に進学されていますが、そこを選んだ理由は何だったのでしょうか。

**藤山** プロダクトのユーザーインターフェースについて学べることが魅力でした。例えば、パソコンのキーボードをどのような配列にすれば最も打ちやすくなるかといったことを考えるのです。そのように物事を最適化していくことに面白味を感じていましたね。手妻に直接的に役立っているわけではありませんが、大学時代の学びを通して、どうすれば芸の面白さをお客さまにうまく伝えられるかを考える際の頭の下地のようなものを養えたと思っています。

**川島** 法政大学には奇術愛好



川島 葵さん

会というマジックサークルがありますが、それも進学を決めた理由の一つだったそうですね。

**藤山** そうですね。高校3年生の時にオープンキャンパスか学園祭で奇術愛好会の発表会を見たんですが、大学でもマジックをやりたいという思いが強くなったので、入学してすぐにサークルの門をたたきました。

**川島** 4年間の学生生活では精力的にマジックに取り組まれていたと伺っていますが、その頃にはプロとして活動していききたいという将来像はあったのでしょうか。

**藤山** マジシャンになりたいという思いは確かにありましたが、どうすればプロになれるのかも分からなかったですし、プロとして生きていけるほどの才能があるとも思っていませんでした。

**川島** 奇術愛好会での活動は、手妻師としてのお仕事にも何か影響は与えていますか。

**藤山** 奇術愛好会で過ごした4年間で、さまざまなことを経験し、たくさんの仲間もできました。私にとって本当にかげがえのない時間ですし、その4年間があったからこそ今の自分があると思っています。

**川島** 当時のメンバーとは今もつながりがあるのですか。

**藤山** 最近でも仲間の結婚式があれば出席して芸を披露したり、現役生の練習に顔を出して指導をすることもあります。また、他大学のマジックサークルとの交流も深かったので、学外にもたくさん友人ができました。彼らとも、今も付き合いが続いています。高校までと違って、大学ではコミュニケーションの幅を大きく広げることができて刺激を受けましたし、とても楽しかったですね。

## 就職活動はせず

## 芸の道へ進むことを決意

**川島** 卒業を控えて就職活動などはされたのでしょうか。

**藤山** 私は全くしませんでした。当時、3年生の10月にサークルの引退発表会が終わると、他の同級生たちは就職活動を意識し始めました。私も一応、大学が主催する就職セミナーを受けに行つて、1時間ほど説明を聞きました。そして、最後に企業から採用情報を受け取るためのメールアドレスを記入する用紙を渡されたのですが、その瞬間、ここに記入するのは何か違うと感じて、その場で紙を伏せて退室しました。今思い返せば、その時、プロマジシャンになろうと決意を固めたんだと思

います。それから師匠のもとを訪ね、弟子入りさせてもらいました。

**川島** 思い切つて決断されたのですね。師匠の藤山新太郎氏に弟子入りされたのは、やはり以前からのご縁があつたことも大きいのでしょうか。

**藤山** 高校3年生から大学4年生まで、毎年何回かお手伝いをさせていただく機会があつたので、師匠の人柄や手妻に対する理解はある程度深まっていました。その上で、この人の下であればプロとして活動できる知識と技術を学べるだろうと思ひ、弟子入りを志願したんです。

**川島** 芸の修業はどのようなところからスタートするのでしょうか。

**藤山** すぐに手妻の芸を教えてくれるわけではありません。最初は、日本舞踊を習うように言われました。手妻は技術だけでなく、立ち居振る舞いも大切です。着物をきちんと着られなければならないし、正しい所作も身に付けなければならないのです。

**川島** 伝統芸能に携わるための素養を養わなければならないのですね。

**藤山** 実は、私は大学1年生の時から日本舞踊を始めて

いました。奇術愛好会の活動で年に数回ステージに立つので、せっかくなら何か舞台事を習っておこうと思ったのがきっかけです。4年間習っていたので、着物は着られま  
すし、最低限の素養もあつたので、比較的早く師匠から  
芸を教えてもらうことができました。師匠からは、日本  
舞踊以外にももう一つ、太鼓や鼓などの鳴り物や三味  
線、長唄といった音楽系の習い事をするように言われま  
した。なぜかというところ、手妻は、和の曲に合わせて見せる  
ものなので、そのための耳を養い、和の音を聴けるよう  
なることが求められるからです。私は6年間、太鼓と鼓を  
習いました。そうして和の文化がある程度身に付き、分  
かるようになって初めて、手妻がただのマジックではなく、  
伝統的な古典芸能なのだということが理解できるよう  
になりました。

## マジックの世界大会で 手妻の在り方を世に問う

**川島** 独り立ちされてからの功績も素晴らしいですね。  
2012年にはイギリスで開催されたマジック界のオリ  
ンピック「FISM(フィズム)」に日本代表として出場し、

「七変化」という演目を披露されています。また、2014  
年には韓国で開催された「FISM ASIA」で、日本代表  
として参加し、部門1位を受賞。そこで本戦への出場権  
を獲得し、翌年の「FISM」本選では5位に選ばれて  
います。

**藤山** 私にとって大会に出場することは、手妻という古  
典芸能を世に問うための手段です。「FISM」で演じた  
「七変化」には、これからの手妻はこうあるべき、こういう  
表現をした方が未来につながると考えて、自分なりに新  
しい要素を取り入れました。その芸が世界で認められた  
ことには、大きな意味があると思っています。おそらく、  
伝統的な手妻をそのまま披露しても賞は獲れなかったで  
しょう。日本にはこんな古典芸能があると知ってもらっ  
ただけでなく、表現の工夫次第で十分に世界に通用すると示  
せたことに意義があると思います。

**川島** 「七変化」の基になるマジックは学生時代にすで  
に考案されていたそうですね。

**藤山** 大学3年生の時にお面を使ったマジックをやってみ  
たいと思って研究を重ねたのですが、その結果、お面が次々  
に変わっていく変面という中国の伝統芸能に行き着きまし



た。それを自分なりにアレンジして、学生の時に一つの形ができました。3年生の終わりには、弟子入りしてプロになることを決めていましたから、4年生の1年間で、現在の自分の実力がどれほどのものか確かめようと考え、お面の演目で片っ端からマジックのコンテストに出場していました。

**川島** 学生時代のアイデアが将来につながったんですね。

**藤山** 今の「七変化」は、学生の時に作った演目を手妻にアレンジしたのですが、当時、こういうものができたら面白いなと思った感覚はやはり正しかったのだと思います。

## 新しいことに挑戦しつつも 時代の中に溶け込みたい

**川島** 私も「七変化」の映像を見させていただきましたが、素早く変化していくお面にとっても驚きました。こうした芸を磨かれる上で、藤山さんが大切にされているものはありますか。

**藤山** 時代の中に溶け込むことを意識しています。伝統文化の中で急に新しいことをやるとすぐに消えていくことが多く、これは古典ではないと言われたり、時代の流れと

ともに振り落とされていったりする。そうすると未来にながらなくなってしまう。古典が現在まで残っているのは、古くから続く絶対的な良さがあるからだと思います。急に時代を変えるのではなく、徐々に芸を進化させて古典として成り立たせる。そうして時代の中に溶け込むことで、ようやく成功と言えるのではないのでしょうか。

**川島** 古き良きものを大切にしながらも、未来を見据えていらっしゃるんですね。ところで、近年はコロナ禍で、興行でもさまざまなお苦労をされたのではないのでしょうか。

**藤山** 公演を中止したり、延期したりすることは何度もありました。舞台に立つ際に一番困ったのはマスクの問題です。客席との距離があり、換気の良い会場ではなるべくマスクを外すのですが、客席が近いところで演じる場合はやはりマスクを着けなくてはなりません。しかし、演じているうちにマスクを着けていることを忘れてしまうことがあります。演目の中で物をくわえる仕草をすることが結構あるのですが、うっかりマスクを着けたままくわえようとしてしまったり。正直やりづらいですが、対応していきかないですね。

**川島** そうした状況の中でも、演目をインターネットで配信するなど新しい取り組みに挑戦されていますね。最近では、あるアイドルグループの舞台でのマジック監修もされています。

**藤山** 2年連続でお手伝いさせてもらいましたが、とても楽しかったですね。異なる分野の方の発想を取り入れたり、今まで手妻に縁がなかった方たちから評価をいただいたり、大きな刺激を受けました。手妻が他の芸能と触れ合って、化学変化することで、また新たな芸能が生まれる。古典を大切にしながらも、そうした新しい試みを続けていきたいと思っています。2022年から始めた巡業では各地でさまざまなゲストをお招きしていますが、異分野の方とコラボレートするたびに手妻の新しい顔が見えてきます。そうした取り組みを繰り返しながら、また面白い形を見つけれればと思っています。

**川島** コロナ禍では、サークルをはじめとする大学生の課外活動も、活動の制約を避けられない状況が続いていますね。

**藤山** 古巣の奇術愛好会も、練習場所が限られてしまったり、新入部員が集まらず運営に苦労したという話を聞かれています。今は、卒業生の力も借りながら、コロナ禍での

新しい形の活動方法を模索しているようです。諦めずに活動を続けていこうという強い思いを持った後輩がいるのは心強いですね。

**川島** コロナ禍で思うように勉学や課外活動に取り組めず、卒業後の進路に不安を抱えている学生が多いと聞きます。そんな学生に対して応援の言葉を頂けますでしょうか。

**藤山** 大学で過ごす期間は、とても貴重です。大変なこともあると思いますが、全てを悲観的に捉えずに、さまざまなことに挑戦してほしいです。熱量を持って何かに取り組んだ経験はきっと大きな糧になりますし、この困難を乗り越えた先に、成長した自分や、新しい表現を見つけれられるのではないのでしょうか。

**川島** 勇気づけられるお言葉ありがとうございます。

今度はぜひ、生の舞台を見に行かせていただきます。

**藤山** ありがとうございます。舞台を楽しんでいただけるように、芸に精進します。

